

名古屋市次期総合計画有識者懇談会（令和 5 年 10 月 12 日開催）

主なテーマ：産業・文化・スポーツ 会議概要

（栗生委員）

- DX の人材育成の中の、中小企業の DX を進めるという方針は非常に同意するが、中小企業の DX が進まない課題というのは人材不足が原因なので、いかにデジタル人材を育成していくかというところは、DX 推進と人材育成両方の観点で必要になる。相互が連携しているということの関連性が見せられるといいかなと思う。
- 小学校 5 年生から IT 教育が入ってきているが、2020 年から高校の普通科高校技術課程で Python という、統計のプログラミング言語が入ってきている。名古屋市内の公立中学校 110 校でプログラミング教育がまだ行き届いていない現状があるので、ここも早急に推進していただかないと高校に入った時にまた差が出てしまうという大きな課題があると思う。
- 事例として、シンガポールの教育は、プログラミング教育が大学入学までにすでに終わっている状態で、大学に入ってから全学部の学生がプログラミングできることが当たり前であるという状況になっていた。
- 中小企業及び社会人の方のリスキリング教育について、一から AI や IT を学ぶというよりは、生成 AI に代表されるように、利用者側のリテラシーを上げることの方が難しくないと思う。
- アントレプレナーシップ教育について、名古屋市では小中高生向けの「起業家たまご塾」をすでに実施してもらっていて、トワイライトスクールでもアントレプレナーシップ教育を取り入れてもらっている。まさに子供が次の世代を支えるという意味でそういった教育的基盤をさらに構築してもらえるとよい。
- カーボンクレジットについて、脱炭素が今後より注目されると思うが、インドネシアの事例で、幼稚園小中学校の校内にすべて「ゼロウェイストボックス」という分類のごみ箱というものが設置されていて、まちを挙げて、子どもの頃からごみの分類と環境意識というものを向上できる環境づくりがある。環境意識を高めるためにも、できることはすぐに取り組んでいただければと思う。
- インドネシアもシンガポールも非常に緑が多かった。やはり脱炭素の観点でも緑溢れるまちづくり、そしてウォーカブルなまちづくりという意味でも名古屋駅から徒歩 20 分内で歩けるようなまちの配置ができるといいと思っている。

（田中委員）

- DX については、やはり我々も企業として DX 人材が全然足りないということと、社員を育成していくというのはなかなかハードルが高いなと思っている。基礎的な知識を持った若い人たちがこれから増えていくというのはすごく重要なことだと思う一方で、私自身は小学校、特に若いうちは、コンピューター教育は本当はあ

まりいらないのではないかと思っている。先ほど高校で差がついてしまうという話もあったが、小中学生がコンピューターに早く触れることが、子どもたちの情緒教育という面で、本当にいいのかというところ若干疑問がある。

○外国からの遅れを取り戻すために何か別の戦略もあるのではないと思う。まちづくりという視点からいくと、やはり子どもたちが伸び伸びと生活しているということが非常に重要なので、体験型の教育など子どもたちの情緒教育に力を入れてはどうか。

○成績が悪いとか発達障害があるという子どもたちというのは、実はアートの分野などの別のすごい能力を持っていることが多い。それを早く見つけ出してあげるための専門職が教育現場に配置され、もっと子どもたちに、文化に触れる、体験する、手を動かす、頭を使う、それからどう遊ぶかということをお教える。そういった取り組みが、文化の基礎を作っていくことになる。

○子どもたちが過ごしやすいまちが作られれば、そこは人が集まるまちになるし、文化が醸成されるまちになる。人が集まらないところに文化は育たないし、文化が育たないところには人が集まらない。そういう考え方が必要ではないかと思う。

○名古屋城に関しては、個人的には早く天守閣を木造でつくるべきだと考えているが、ただ、名古屋城というのは戦争で燃えたわけで、何が一番いけなかったのかということやはり戦争をしたことである。1945年5月14日に名古屋城が燃えた日を名古屋平和の日とすることに僕は賛成で、まずその議論をした上で、名古屋城をどういう形で再建するのかということをお、しっかりと議論していくべきだと思う。

○歴史に結びついた形でのまちづくりとして、もう数少ない歴史的な残っているもの、町並みとか本当に数少なくなってきたが、そういったものをどこまで復元するか、維持していくのかという議論をしっかりとしない、点在しているものが線で結ばれないし、面になっていかないと結局人が歩かないまちになってしまう。やはり歴史に裏付けされているということがすごく重要ではないかなと思っている。

○文化を生業とする方たちはこのコロナ禍で、個人事業主ということもあり非常に苦しい生活に追い込まれたわけだが、そうした部分に関して言えば、大部分は取り戻してきてはいるが、やはり名古屋にアーティストが残らないといけぬ。名古屋には芸術大学が四つも五つもあるのに、活動している人の数が圧倒的に少ない、もしくはプロになるのを諦めてしまった人がたくさんいるということについて、どこに問題があるのか真剣に考えないといけぬ。

○発表する、活躍する場が少ないということに対して、企業を含めて市や県ももっと応援していかぬといけぬ。経済的に文化を支援できない環境になっているのは致命的だと思う。

(來田委員)

- 中間案の 12 ページに、「豊かな文化を有し、スポーツを楽しめる都市」とあるが、市民目線での文化に関する記述が非常に乏しく、もう少し書きぶりを厚くしてもいいんじゃないかなと感じた。名古屋の文化の奥行きの高さであるとか、あるいは文化はそもそも市民が主人公なので、その共感を引き出せるとよいのではないかな。
- スポーツが関係するところとして、中間案 54 ページ施策 40「スポーツを活かしたまちづくり」の「スポーツを活かした魅力の創出・発信」というところが、抽象的で施策として今ひとつわかりにくいという印象を受けた。方向性としては、スポーツを通じたスポーツツーリズムの活性化とか、スポーツ産業を基盤にした国際的な交流の活性化とか、多様な人々が健康で安心して暮らせるとか、そういう感じで書いた方がよりわかりやすく施策に落とし込めるのではないかな。
- 60 ページの中段あたりのウォークブルの説明として、「公共的空間をはじめとした既存ストックの再構築や利活用により、人々が集い、憩い、多様な活動を繰り広げられる場へとしていく」となっているが、もう少し居心地の良さや歩きたくなるという印象の部分の説明がないと、何がしたいのか、どういう空間にしたいのかが、今ひとつわかりづらいのではないかなという印象を持った。
- 93 ページの戦略のタイトルが「子ども・若者の希望や夢を社会全体で応援します」となっているがこれはすごく難しいと思っていて、まず子どもや若者がなかなか夢が持てないということが言われ、また子どもや若者の希望や夢というものすごく多様化している中で、それを社会全体で応援する施策とはどういう戦略なんだろうと思わざるを得ないような、かなり大振りな表現になっているので、もうちょっと具体的な戦略を反映させたタイトルにできないのかなと感じた。
- スポーツということから言うと、94 ページの戦略 2 (2) ②に、アウトリーチ型も含めた支援に取り組みますと書いてあるが、意外に身体活動やスポーツ、あるいはもっと広く遊びを提供するような場面をつくる取り組みというのはあまりなされていない。この支援の中に、より積極的な意味での健康増進、ウェルビーイングとして、自分の健康を高められるというような身体活動や、スポーツの文脈を少し入れていただけると、よりポジティブな意味での健康づくりの支援ができるのではないかな。
- 95 ページの戦略 3 の (1) にも世代に応じた健康づくりとあるが、これとスポーツ推進施策とが一体化していくような形の書き方にすると、より効果的なのではないかと思った。
- 一方で 96 ページの、バリアフリー・ユニバーサルデザインのまちづくりというところを見ると、アジア・アジアパラ競技大会のことが入ってはいるが、どうして

も身体障害に意識が寄っているというイメージがある。ここはハード面の整備だけでなく、様々な障害や人間が置かれた状況に対する意識のバリアフリー、排除や差別がない状態をめざすためのソフト面も意識のバリアフリーも大事である。

○スポーツ庁のユニバーサルデザインのスポーツ施設計画の委員会に入っていて、その中の議論で、単純に建物やインフラのところを整えただけでは全然駄目だという結論に達した。むしろその場所で何か起きたときに、専門家と繋がっている状態が構築されているというような、人の繋がりというソフト面が大事で、結局最終に仕上げた資料は人のネットワークというソフト面のこともきっちり書いておくということになった。人の問題が非常に大きいという文脈をここに入れておいてはどうかと思う。

○97 ページの戦略 4 について、東日本大震災の後の調査では災害から自分の身を守ることができた理由の一つに、日頃からの身体活動のレベルが高かったのではないかという調査結果が出ている。また、被災した後の健康の維持も当然重要なので、防災の考え方の中に身体作りというようなことも入れることを、少しご検討いただければと思う。

○重点戦略の 5 (2) の文脈の中に大規模な国際スポーツイベントを活用するという文脈を入れてはどうか。大規模な国際スポーツイベントには、当然人が集まってくるので、例えばその大会を運営するときにどれだけ温室効果ガスを減らせるのか、あるいは再生可能エネルギーを使っていけるのかなど、課題に対する最適なモデルケースになるはずである。オリンピックなどの国際的なスポーツイベントは現在そういった方向で動いているということをご紹介しておきたいと思う。

(田中委員)

○民間がスポーツをビジネスとしてとらえていくとき、例えば学校のグラウンドや体育館などの公共施設をもっと自由に開放して使えるとよいのだが、体育館の利用は消防法などの問題があって、ハードルが高いというのを聞いたことがある。

○何かうまく規制にかからないような方法があれば、市民や企業が体育館を使って自由に新しいビジネスを作ることができる。やりたくても、ルールがわからない人たちはなかなかそこに参画しようとはしないので、学校という施設がもっと身近に使えるような環境を作れるとよい。

(栗生委員)

○今の体育館の話でいうと、なごのキャンパスは元々、那古野小学校の跡地だが、体育館の利用予約が最も多い。会社帰りに仲間で使ってみたいという方もいるし、部活の民営化などで、子どもが成長期におけるスポーツをする機会が減っている関係で、なごのキャンパスの体育館でやっているスポーツ教室に通っている親子もいる。体育館の開放は非常に有効である。

- プロバスケットも、もちろん観客動員数はB1リーグの目標があるとはいえ、ダイヤモンドドルフィンズさんなどは名古屋市の小学生に無料招待もされている。53ページに書かれている、「する・みる・ささえる」について、スポーツ業界の方と話すと、まず見てもらって、やってもらって、今度はサポーターになるっていう流れがあるので、順番が「する・みる・ささえる」というよりは、「みて・やってみて・ささえる」という方が順番としては適切なのかもしれない。スポーツ庁で使われている表現とのことなので変えることは難しいのかもしれないが。
- 小学校5年生と中学校2年生の体力テストの結果が、47都道府県中名古屋市は43位から45位と非常に残念な結果になっていて、不登校も実はその健康面、運動能力低下と因果関係があるのではないかという研究も出ている。やはりスポーツをまず見てやってもらう機会を、官民連携でどんどん増やすような施策ができるといいなと思う。
- 今、教育系やスポーツ系のスタートアップベンチャーも増えてきているが、「ロゲイニング」という、観光とスポーツを組み合わせたものがある。このロゲイニングを名古屋でやると、全国から人が集まってきて、名古屋の応募人数が毎回一番多い。名古屋は観光人気がないと言われているが、ロゲイニング自体が、世界中からも注目されているので、外国人への発信という点でも、名古屋の一つのコンテンツとして施策に入ってくると面白いのではないかなと思う。

(来田委員)

- 体育館の使用に関しては、運動部活動の地域移行との関わりをどううまく連動させるかということが、多分大きな課題になっていくのだろうと思う。
- アジア・アジアパラ競技大会を開催すること自体が計画では重く取り上げられているが、瑞穂陸上競技場を新しく建て替えるのに伴い、瑞穂公園も税金を投じてすごくいい公園にしようとしているので、市民の皆が集まれるような拠点、例えばウォーカブルなまちの拠点のような形で計画に入ってきてもいいのではないかなと思った。
- 名古屋市の文化芸術推進計画2025に、「ユネスコ・デザイン都市なごや」、「ユネスコ創造都市ネットワーク」といった取り組みが書かれているが、この内容が全然計画に書かれていないので、重点政策としてちゃんと書かれているという構成がやはりよいのではないかなと思う。

(田中委員)

- また名古屋城の話になるが、障害者のためにエレベーターを作るという議論は大事だが、それだけではなくて、ハードだけでは解決できない問題がすごくある。
- 企業として障害者雇用にも取り組まないといけないが、多目的トイレをつくるなどの準備をしても、障害者雇用は安定しない。なぜ安定しないのかというと、障

害者が本当に働きたい仕事に就いていないという大きな問題がある。大きな視点として、まち全体を見て、まちは障害者に対してどういうことを提案しているのかというところが、やはり非常に重要で、ただスロープ、エレベーターを作りましたということだけでは解決しないということを、もっと議論していかなければならない。

○手話の教室を街中にたくさん作るということが重要ではないかと思っている。手話が習える場所がなかなかないので、親子で通える手話教室をどんどんつくっていくことで、聴覚障害を持つ人たちに対してのまちづくりができるようになる。障害者の人に寄り添い、自分も障害者の立場になったつもりで暮らさないとわからないことがたくさんあると思う。

○もう一つ学校を借りてやりたいと思っているのが、ブラインドサッカー教室。これは障害のない方もルールを守れば出られるので、ブラインドサッカーを通じてどんなことが大変なのか、どこが面白いのか、健常者の方がわかるようになるということがあるので、そうするともっと障害のある方と親しく付き合うことのできるまちづくりができるんじゃないかと思う。公園でもいいのだが、そういう意味でも学校のスペースを開放していただけると、いろんな可能性が広がる。

(來田委員)

○田中委員に同感で、まさにインクルーシブ教育みたいなものが欠けており、例えば戦略2で、多様化する社会で子どもたちが成長していくために何をすべきかということが書かれているが、次の世代の子どもたちの多様性を受けとめていく力を育てるんだという文脈がここに出てくるとよい。そのために、インクルーシブ教育の推進みたいな内容が入ってくるとよくて、まさにブラインドサッカーなんかはツールとしては最適である。